伊地知文庫
文庫20
315
4

文庫20
315
4

八雲云口傳　号源平一統

[illegible]

[illegible]
[illegible]

天象　地儀　樹木　草花　鳥獣　人倫　資財器用　衣服　飲食　居所　人事　時節　月日　水

知恵海水　資守新院

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす

月日水　後鳥羽院



ふるあめ　雨　春雨　夏雨　秋雨　冬雨　時雨　村雨　夕立　雨脚　雨中　雨後　雨夜　雨中月　雨中花　雨中鶯　雨中郭公　雨中紅葉　雨中雪　雨中恋　雨中旅　雨中述懐　雨中祝　雨中釋教　雨中神祇　雨中雜

春雨

春の雨は花の色をそめ山の色をあらはすなりとかの人のいへるこそ

春雨の降るにつけてもいとはるかなる人の心のうらめしきかな

春雨の降りしきる

除朝送紙

除目之

除目之

物あり新敷い[illegible]

池水寒冬

池のといたあるかとうろこ[illegible]

[illegible]

[illegible]

あさぼらけ　但新勅撰いかなるもののやどりぞと
へりしん勅撰とあり　白川つくりそめしと
ころなれど　源氏ゆめ浮橋　堀川院百首
勅撰　ながつきのあけぬるかとの　新勅撰
ながつきのあけぬるかとの　ながつきの
ながつきのあけぬるかとの　ながつきの
ながつきのあけぬるかとの　ながつきの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後撰

八重むぐらしげれる宿のさびしきに
人こそみえぬ秋はきにけり

しらつゆかとよそへてみれば
こがらしに散りまがへるもみぢ葉

牡丹　ふかくさ

紫苑　器のそこくさ

蘭　ちりぬる風

あるかなきかの匂ひにて
ちりぬる風のなごりなりけり

又花のいとかるるやうにて
ちりぬる風のなごりなりけり

別紙ちり花の匂ひのあるかなきかの
乃ちくれなゐ下

紅葉ちりしかの
へし紅葉ちりしかの
ちりぬるかぜのなごりなりけり

そめ門をたちこめてこもりゐたる
人よりかなりてふ
ちりぬるかぜのなごりなりけり

ちりぬる風をいとのこりなく
吉野のさくらの花をおもひ

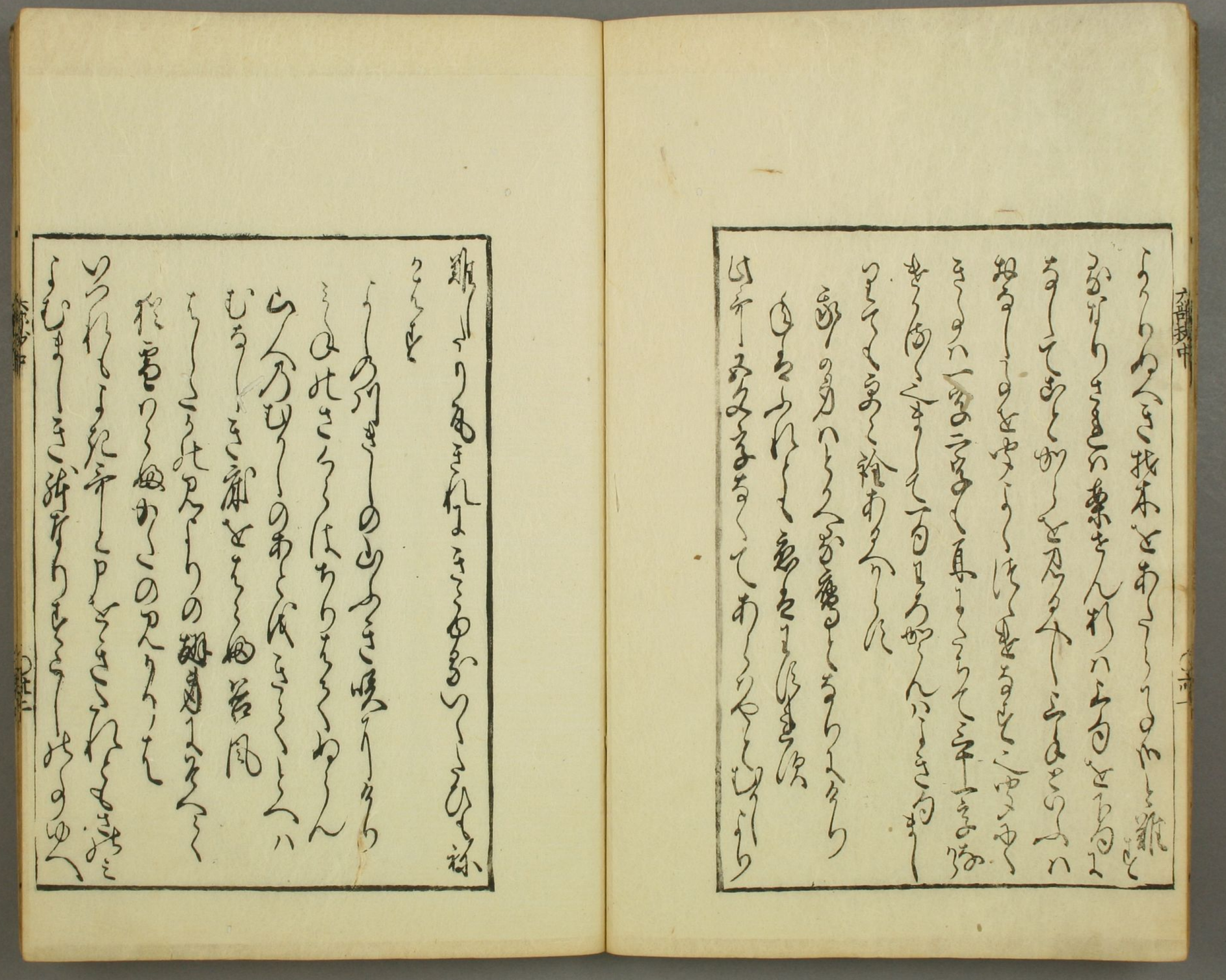
[illegible]

[illegible]

[illegible]

よもすがらものおもふころは明やすき
こゝろ計にて人のあはれ撰集のなかに
一首もとりよせられて侍りしかさる百首
をよみ給ひし時はかくこそ侍りしか
あくがれにしたりしかさる紙にかきて
秀逸出さるゝ人歌をこゝろ
さしにしたがへてこゝろもとゝ
ゝ侍りしをもとゝ
ゝ侍りしをもとゝ
ゝ侍りしを

文字屋源右衛門
宮内丞
日本六十六部
四条の弁
京の弁
恵の弁
恵の弁
恵



行乃とうさうにかりてさくゆう
ちる雪にて行ゆくとりとなり
月とれぬくもうぬ山さくらは
こしの乃あさくりして
日ちれはあくしまさくちる
こしのあくしの乃きりして
行くへ信濃路の行ふのあさふて
おもうくとさくもちくさくて
浪於遠ふのうるめ花ちまきれのうく
ちくひくちくちくふりや



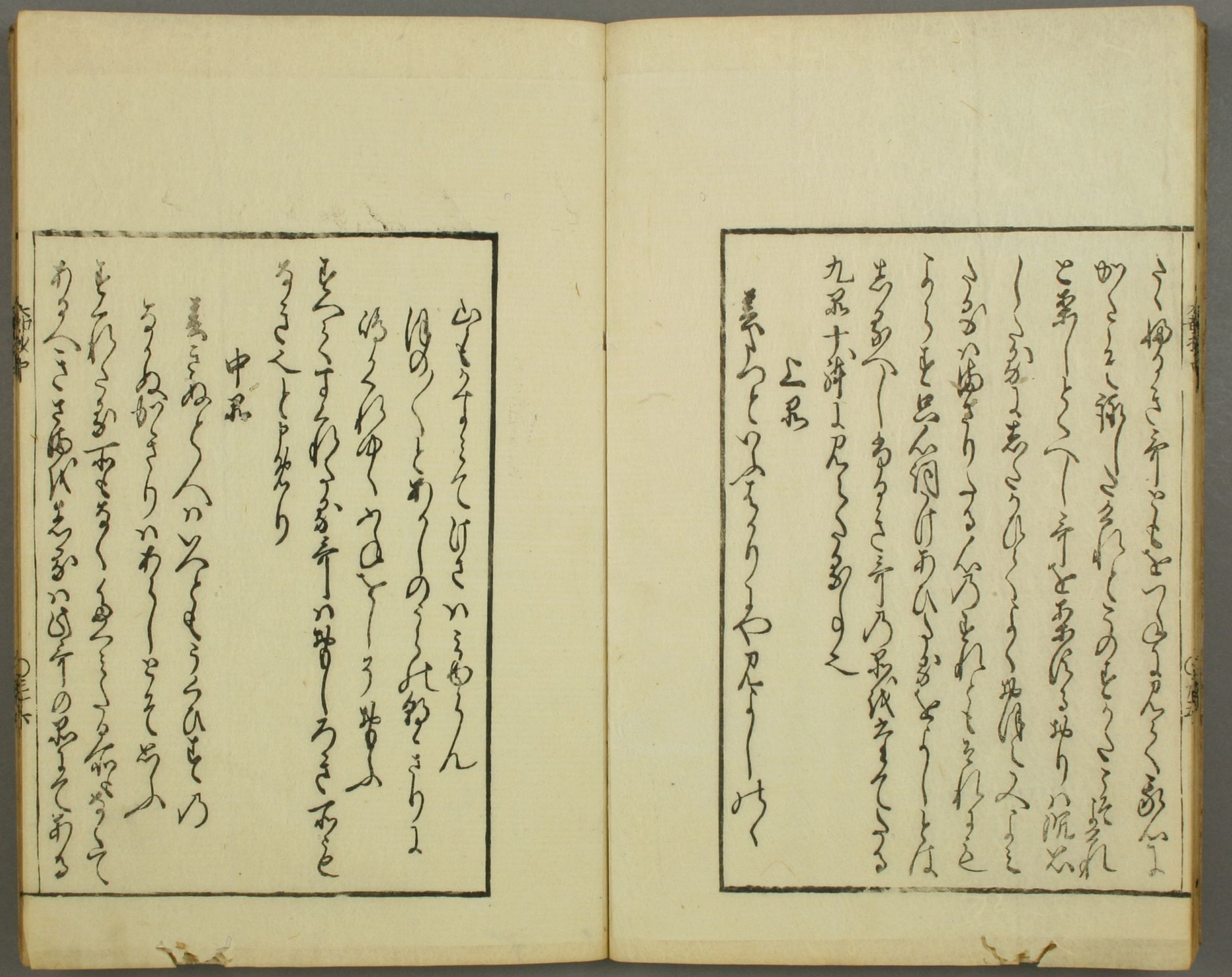
河ふのうりまうく梅花ちくく縄
うくくてのこ黄紙ちくるか
ふ行ハふちくうく行ちりかう
の行くくくくくへて行ちくくく合
くる行ハおく
ちくちくく花乃ちくくにちくくう
山乃端くくに梅くるくくくも
みやくくん梅ふくくのくくくう
花の雲ちくるくくの乃あ雲の
くくれくるる雲ちくくて

すしくそるゆてうちのそ
うくなく山ゆく乃そ
尾能なくあさのゆそれ
ゆくさの乃そのうちはれく
ゆてうや雲乃さえまるくん
ちのれうをさりゆ清るち
うるくゆるありあをの月
うりをなんをうをの山れうく
うもくれたゆくんもれ
をゆてりまくうくんれうまや



をゆ後乃をまや清りあくれか
世乃ゆくゆ道をあれたるひへ
山の地くうをあくなる
さりくたうき雲乃へくあるい
ゆくりまくへきれ乃この世乃
うれをみくあるくんはうんゆくれ
時代ありてゆ今乃るゆ月ゆるゆくと
ゆてりたるくの月れいゆくにくるゆ
るれくうくゆるゆくくゆるゆ寛年花
乃ゆまくあくりちくゆ行く奏後

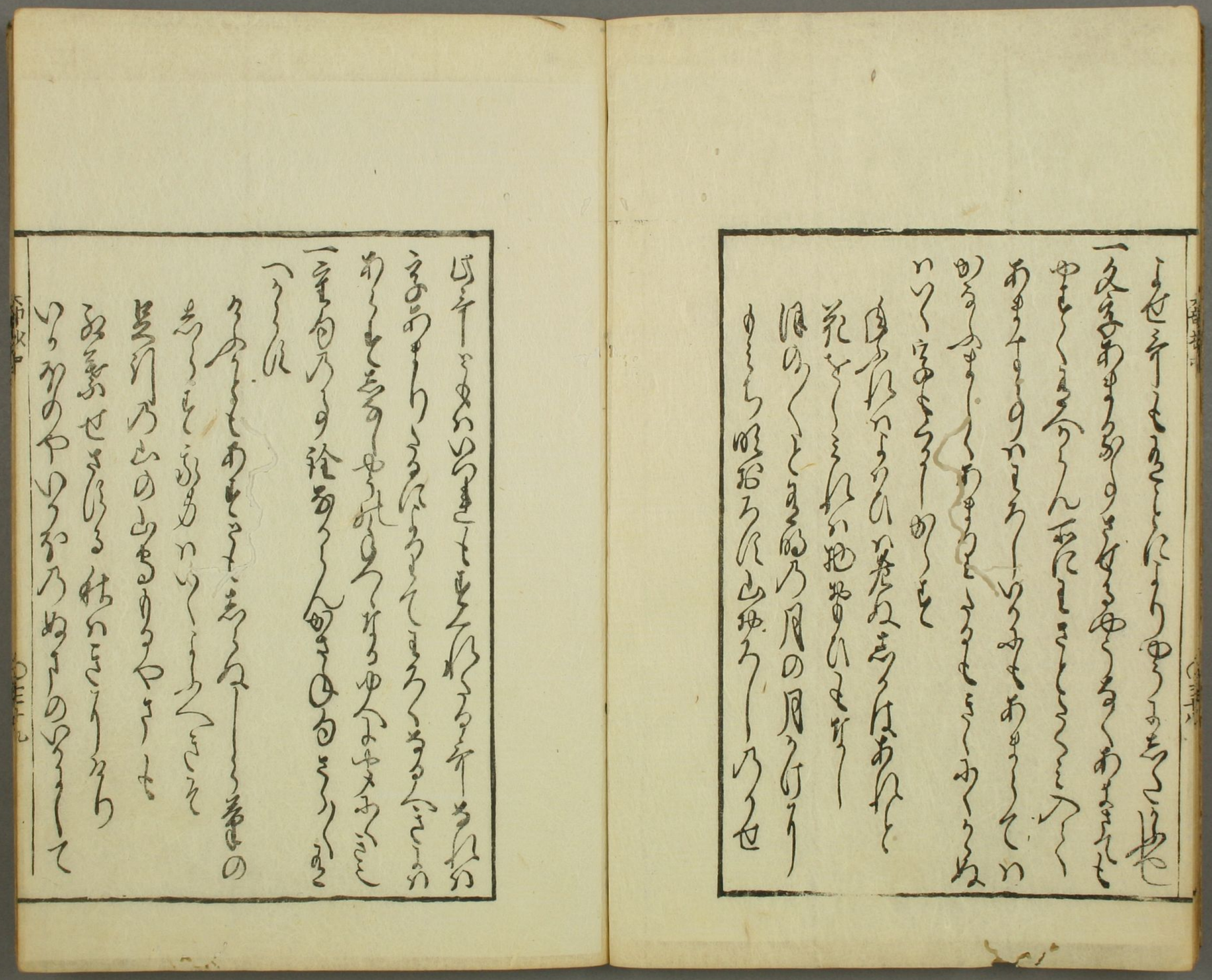
後撰後拾遺ゆゑ
[illegible]
[illegible]
[illegible]



[illegible]

下句

世の中のうきもつらきもたまとうけ
一日ずつあるひ面白きよろこん
[illegible]古今序に四季の花の
[illegible]
[illegible]
[illegible]



[illegible]人を今ひとあらん
かくとたえやらぬものさしまさ
さしもあしなるものかなひを
うれしかりうねとそろふはすちを
このこころのすのかうしたはすれち
こころかからやすくいまもあり
やうなるものをたれあてそれ人のあらと
人よまいはすというてもしろさく
一すれはすのうたよあんはとの
しをもちわすれはやはうん



[illegible]今[illegible]
[illegible]人さよあらんとは中はいさう何文
うりゑ古来よあまいとく今いんは後
ねことをしつけうんもあるひまは
はのくことをしたりうの何をうしは物
ものをはやをうんひのをうひはのん
のうをはしうんはうんはうんん
かすをのをうを
うををうを
花入者うを

月よりとふ
月やとまの
名なるなかり
雲をのかる
ちれいあとを
書乃ゆくへ
ちらぬあさ
ありて出る
月のうつよ
あうしの風

わすれよとうら
やましれ
をもわすれのの
わすれをも独乃
夢ぬまを海
くゆくあつまもの
あはれをきこぬ
あのをもりて
むとうぬ水り
きみをふりてのの

[illegible]

月さえひとの

はのあるれる

[illegible]の河いわ[illegible]くあるるのれい流れ人の

[illegible]れ[illegible]れとの[illegible]のひとり流れ出て家

ゆとやらるといと[illegible]とめり様ちる事の

[illegible]るとのつ[illegible]の[illegible]れい

[illegible]といまれ

[illegible]

一首詮[illegible]

[illegible]

[illegible]れ[illegible]の河いくつもとるまきれを

のそうんとすんあいかあるうしたさせる

河辺ゆくるさ[illegible]

一古歌とるのすみ白の白とむるす

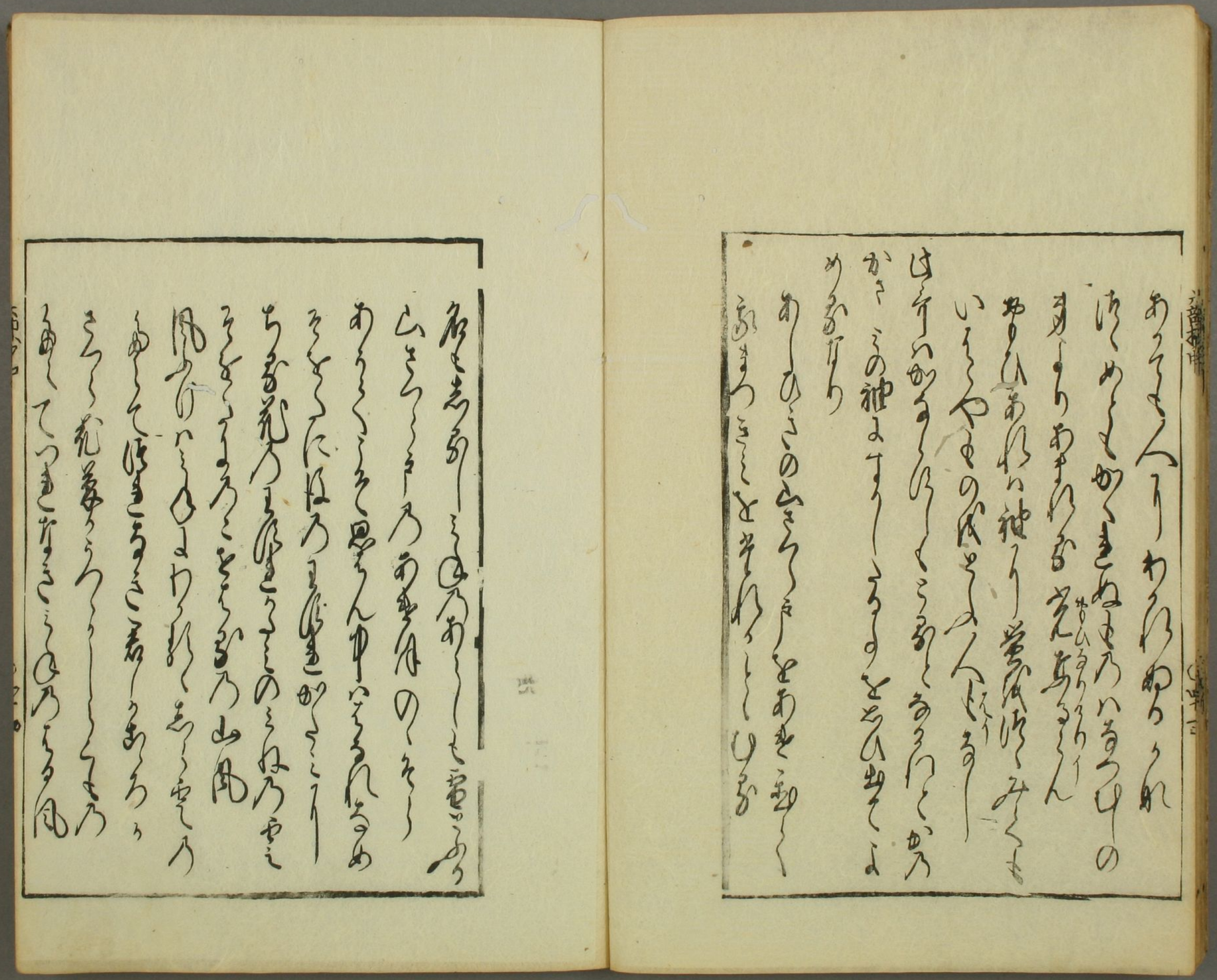
あるへりれそゆ[illegible]

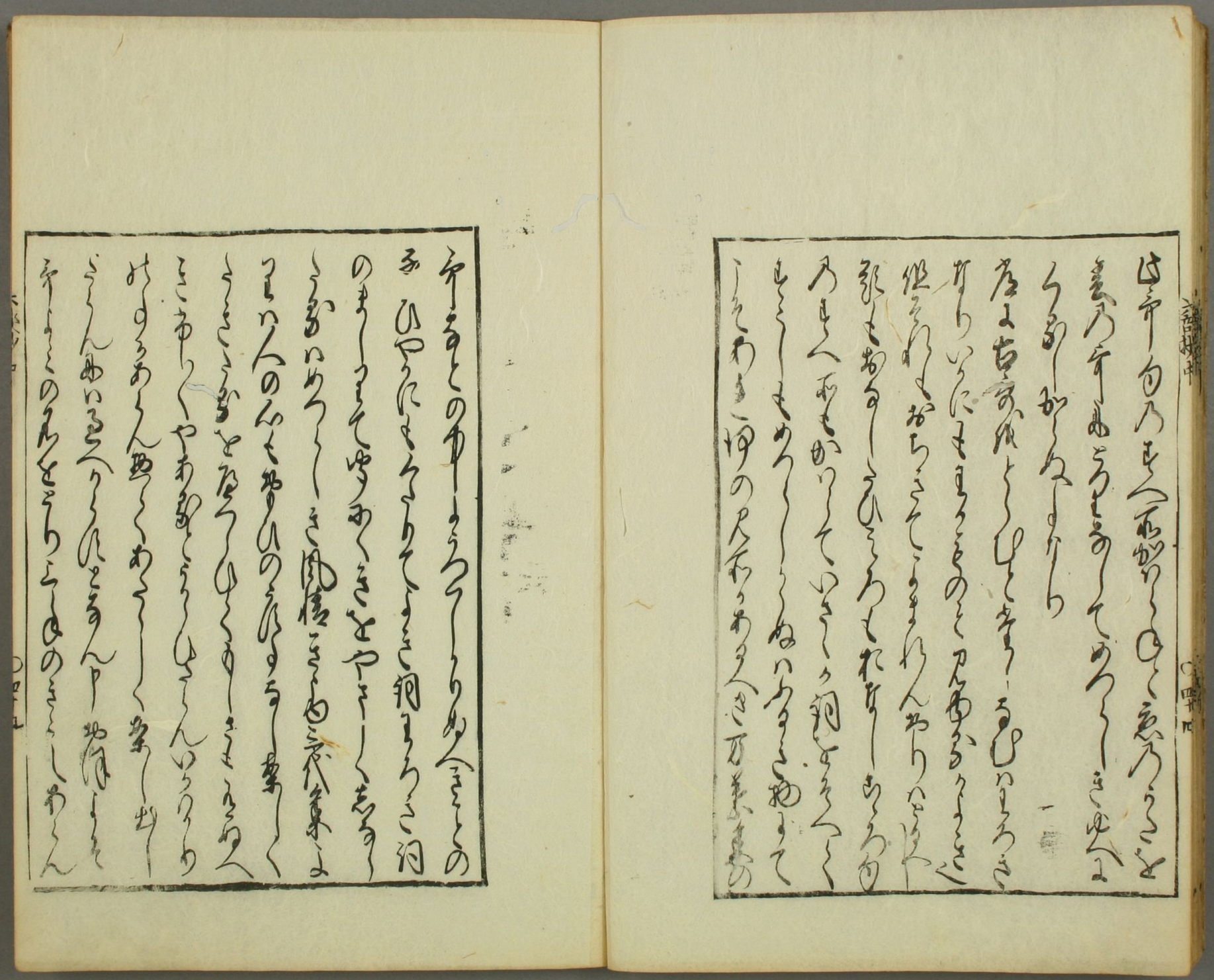
白千[illegible]

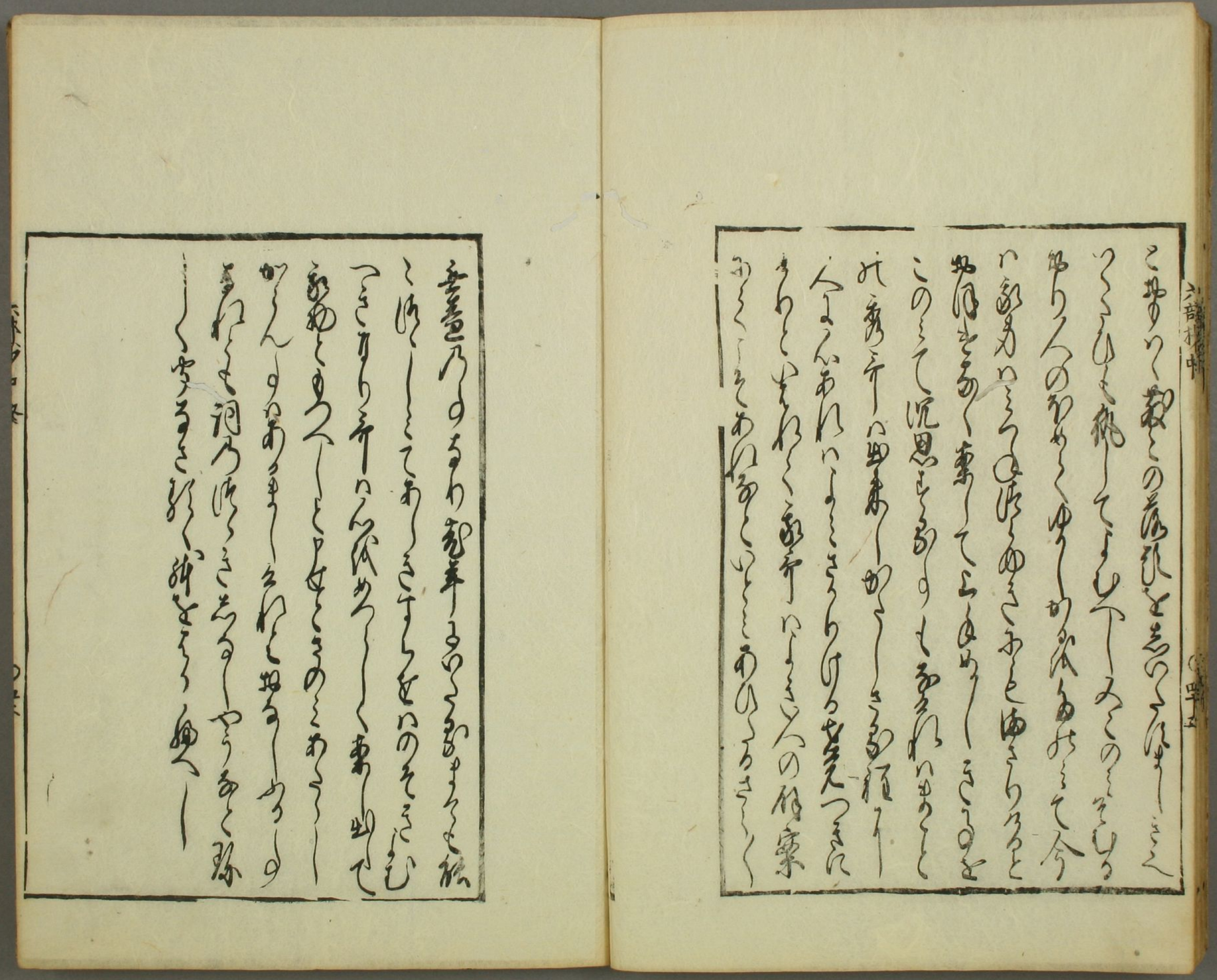
ひとみ[illegible]

出るれ出[illegible]

ひとみのしてふにるの[illegible]







東鑑卒

弘長三年癸亥十月
六日將軍家五百首
御詠被入道
融覺加點返上則
副一卷被入懷奥
旨猶可被凝御
沈思之由

弘長之比任先人之庭訓為後学之
遺誡不顧老眼之不慥而中記事
當家之外而他家事之丁秘之

融覺 判

N